

『私の趣味 登山』

1 登山の楽しみとは

何が楽しくて山に登るのかは、「そこに山があるから」と言っただけと伝えられるジョージ・マロリー（注1）を初めとして、「山に登ってそれを自慢話の種にするというのも答えの一つ」と書いた串田孫一（エッセイ集「もう登らない山」）まで、あるいは親しい仲間とのふれ合いが楽しいという人、山頂で迎えるご来光の荘厳さに心洗われる人、ダイエットによいか山ガールファッションが好きな人とか、まさに百人百様でしょう。

私の場合、登山を始めたのは大学に入ってからですが、学生時代は後に述べるとおりラグビーのトレーニング目的で始めましたので、何かの楽しみを求めて山に登っていたわけではありません。しかし、見知らぬ場所に行き、始めてみる景色に驚き、あれこれと知りたいことが出てくるというのも楽しみの一つではあるのでしょうか。社会人になってからは、仕事で野外に出ることは滅多になく、通常は毎日の通勤時間を除く1日のほとんどを屋内での書類の読み書きか、人との面談か、会議か裁判かで過ごしますから、壁も天井もない山で遠くの景色を見てなんとも言えずリラックスできることが楽しみといえれば楽しみです。

注1 1924年にエベレストで遭難、1999年に遺体が発見されたイギリスの登山家

2 学生時代の登山

夏休みが終わると2年生は専門課程の学科が決まりますが、その連中をスカウトしようと新入生のときと同様の部・サークルのリクルート活動が行われます。1年生の私はリクルートの対象外ですが、「東京大学法学部山の会」（後に「東京大学山の会」と改称）のコーナーを目にし、「法学部でないダメか」と尋ねると「他学部でも構わないし、実際経済学部も医学部もいる」というので、「来年法学部に進むのですが」と言うと「今年じゃないのか、それじゃダメだ」との返答。ここで簡単に引き下がるわけにはいかないと「春学期の期末試験の成績もトップグループだったし、来年は必ず法学部に行きます。万一そうならなかったら、そのときに退部扱いとしてください」と粘ったら、面白いヤツだと言って入部を認めてくれました。こうしてラグビー部と山の会の二股部活が始まりました。「二股」といっても山の会の山行は任意参加でしたから、会山行に参加するのはラグビーのオフシーズンだけでした。

2年生になって将来を考えるようになり、なれるものなら弁護士にと思いました。ラグビー部の上級生に「部の先輩弁護士に会って話を聞きたいので、何人か紹介してください」と頼んだところ、「たしか二人いると聞いたが」と言われ、「卒業するまでラグビーをやっていると司法試験合格は無理らしい」と分かりました。こうしてラグビー部を中退し、司法試験準備に取りかかりましたが、勉強ばかりでは成果が上がりにくいと勝手な理屈をつけて、できる限り山を継続しました。大学4年の夏に論文試験に合格した

後は「現役合格者は最終口頭試問に落ちることがない」という俗説を信じて、卒業するまで北・南・中央アルプスから奥秩父・丹沢までせっせと登りました。

年間最大のイベントは夏合宿、北アルプス立山・剣岳から槍ヶ岳・穂高岳まで7泊8日のテント縦走でした。昭和30年代後半のことですから、ザックに限らずテント・寝袋・炊事用具・食材など、あらゆる装備が現在とは比較にならない重量です。合宿参加者全員本郷の部室から上野駅までザックを背負って歩くのですが、出発前に台秤で各自のザックの重量を量って公平を期します。調整後の私のザックは40Kgを超えました。山に入って3日目の夕食メニューはビーフカレー、私は炊事当番の一人でした。出発当日にアメ横で仕入れた牛肉を味噌の中に漬け込んだものを運んできましたが、高山とはいえ夏の直射日光のエネルギーは馬鹿になりません。牛肉は腐敗が始まり異臭を放っていました。私は炊事当番の相棒に「リーダーに報告して万一廃棄となったらビーフカレーがパーだ。カレーだから臭い消し効果があるだろ。黙って調理しようぜ」と持ちかけ、ビーフカレーが出来上がりました。食べ始めたメンバーが口々に「変な匂いがする」「食っても大丈夫か」など言いながら結局全員食べてしまいました。総勢12、3名でしたが、何事もなかったのは私を含む2名だけで、あとの10人くらいは揃って悲惨なことになります。

このビーフカレー事件があった夏合宿のときの忘れられない思い出がもう一つあります。上野駅のホームで金沢行き夜行列車を待っているとき、先頭に並んでいた私たちから10メートル以上後ろ、女子大生らしき美人（とびきりのです。）と目が合いました。クラクラとなった私は、駅員の乗車合図と同時に車内に飛び込み、素早く二人分の座席を確保しました。そして後から入ってきた彼女に「ここ空いています。どうぞ」と言うやいなや彼女のスーツケースに手を伸ばし、網棚に上げてしまいました。彼女は、やむなくであったかも知れませんが、私の隣に座りました。若い二人は四方山話に花が咲き、まわりが寝入ってから小声で話し続けました。「山の帰りに富山市内の実家に立ち寄ってください。歓迎します」と言われましたが、山の帰りは上高地に下山なので、断腸の思いで断りました。しかし、東京での再会をしっかりと約束して。

大学を出て司法修習生になりました。身分は国家公務員、国から大卒初任給に引けを取らない水準の給与が支給されましたが、気分は呑気な大学院生でした。いくらさぼってもクビにならず落第も滅多にしないという先輩の言を信じて、学生時代よりも一層せっせと山に通いました。

司法修習生時代に登った中で忘れられないのは北鎌尾根です。知らない人は「尾根」というから普通の登山ルートだろうと思うでしょうが、山好きなら知っている北アルプス最難関の尾根ルートです。（注2）北鎌尾根は最近の登山ガイドブックによると要岩登り装備とあります。ヘルメットもロープもなしで出かけた私と相棒は怖い思いをしました。ここで落ちたら安楽死だというような場所の一つで私のザックに付けていた金属製水筒がザックを離れて谷底に落ちていきました。カーンカーンと音を立てながら数回

バウンドして数百メートル下の底まで落下するのを自分の目で見続けながら、「ありがとう。身代わり水筒君」と口に出して感謝しました。その数時間後、槍ヶ岳の頂上にひょこっと顔をだすと一般ルートから頂上に来た登山者に「どこから登ってきたのか」と聞かれ、頂上から北に向かって伸びる峻険な北鎌尾根を誇らしげに指差しました。

注2 難易度は西穂奥穂縦走の方が上という人もいますが、今の北鎌は昔から使われた湯股ルートでなく中房温泉または上高地から入る貧乏沢ルートですから、単純に比較はできません。

3 社会人になっての登山

2年間の司法修習生が終わり、大手法律事務所の末席弁護士となってみると、仕事仕事で追いまくられる地獄の日々が待っていました。先輩弁護士から木曜日か金曜日に「これやっという。月曜日の朝までに」と仕事をもらったら土曜も日曜もありません。月曜日の朝、先輩のデスクの上に結果を届けられなかった新人（私ではありません。）が「まさか夜だからと何時間も寝たわけじゃないだろうね」といわれたとか。私は数年後に米国ロースクール留学を計画していましたので、仕事の合間に英会話学校にも通わなければならず、とても山に登る時間も気力もありませんでした。

留学する前も帰国してからも、時間と気力の欠乏状態は一貫して変わらず、気がつくと40台半ばでした。ちょうどその頃、次男が東葛高校に入学して登山部に入ったというので、先達の権威を示すチャンス到来と思い、次男が行きたいという南アルプス白峰三山（注3）のテント縦走に行きました。ところが実際には、先達の権威を示すどころか、荷物の重量を6対4で軽くしてもらい、それでも次男のペースについていけない始末でした。

白峰三山から戻って、山に行くためのオフロード車が欲しくなり、当時まだ珍しかった三菱パジェロを買いました。それからの10数年が私の本格登山第2期、中高年登山ブーム以前でした。

注3 富士山に次ぐ標高を誇る北岳とこれに連なる間ノ岳および農鳥岳をいいます。

4 中高年登山

三菱パジェロを山行の足に使うようになってからは、学生時代に行けなかった北海道の山に登るために毎夏早々と10日間の夏休みを取り、フェリー（出発港は新潟港、東京港、大洗港、仙台港のどれかでした。）で日本海または太平洋をパジェロごと小樽、苫小牧または釧路に渡り、これはという山々を片っぱしから登りました。登る前後は決まって秘湯の宿です。北海道の次に頻繁に出かけたのは、やはり学生の時にあまり足を運ばなかった東北、そして甲信越の山々です。この地域も秘湯の宿がたくさんあります。

1994年正月に屋久島に行って宮之浦岳に登り、帰りには開聞岳、韓国山と九重山に登りました。この頃、深田久弥の百名山を意識するようになりました。深田久弥は戦前東大の哲学科を出たという物書きですが、1960年代に出版して読売文学賞をもら

った「日本百名山」以外に何か書いたのかという程度の小説家ないしエッセイストです。この原稿を書くので調べてみたら、深田久弥は戦前東大の学生時代に小説を書いて「文壇的評価」を得たが、後年同棲していた北畠八穂の作品のパクリと判明、評価が地に落ちたという男でした。北畠八穂とは学生アルバイト先の出版社で知り合って恋に落ち、大学を中退して同棲、のちに結婚したが、浮気がばれて北畠八穂は激怒し、パクリの真相をばらしたとか。しかし彼が書いた「日本百名山」は今でも一定のペースで売れ続けている本で、多くのアマチュア登山者がそこに収められている 100 座の山を全部登りたいとか、登り終えたとか言っています。ほかならぬ私も荒島岳とか大台ヶ原山とか富士山とか、「日本百名山」でなければ登らないで終わったような山々に登りました。

55 歳になった 1996 年春、数えてみると深田久弥の百名山は残すところ 4 座となっていました。以前から山仲間に「人が勝手に決めた 100 座を巡礼者よろしく登りまくるのはくだらない」とうそぶいていた私でしたが、「富士山以外は全部登ってしまうか」と四国の剣山と石槌山に出かけ、その帰りに大台ヶ原山、これで残るは富士山だけになりました。そしてその夏のある日、山の同期が御殿場でゴルフコンペをというので参加することになっていました。学生時代から「富士は眺める山であって、登る山ではない」というのが信条でしたから、富士山だけは登らないでおこうというのが筋の通る話なのですが、ここで宗旨替え、「御殿場に行くんだから登ってやるか」と変心、自宅を早起きして出発、柏インターから一路高速を走って御殿場の登山口に到着、最小限の食料飲料と防寒ウェアを入れただけの軽いザックで登り始め、先に行く登山者を次々に追い越し、頂上でのお鉢巡りを済ませて急ぎ下山、駐車場のマイカーを取って夕闇迫る富士を後に山の同期の一人が持つ御殿場のマンションに向かいました。スピード登山にかけては人後に落ちないと豪語し、毎年欠かさず 3,000 メートル級の山にいくつか登り、登山病など誰がなるのかとうそぶいていた私がなんと富士山の頂上を目前にして登山病を自覚しました。標高 10 メートルの柏から一気に高度 3,800 メートル近くまで上がれば高山病になってもおかしくないかと思いました。私が山で高山病になったのは後にも先にもこのときだけです。

還暦になった頃、妻が「万一ということもあるから、単独行はそろそろおしまいにしたらどうか。どこかの会に入ってグループでも山に行けるでしょ」というので、「万一はない」と断言する根拠もない以上、この際妻の言うことに従うことにして、その頃通っていたフィットネスクラブの山好きたちのクラブに入会しました。しかし、初心者レベルの会員が大半で、会山行で行くのも月並みな山が多く、会山行に参加するよりも「企画山行」と称して中上級レベルの会員に声をかけ、オーダーメイド山行をすることが多い不良会員でした。

70 歳になった 2011 年春、大震災の直後でしたが、私の心臓は心不全を起こしました。本人が気づかないまま相当悪化していたらしく、虎ノ門病院に電話して症状を伝えると大至急入院せよと言われ、翌日から入院生活となりました。一時帰宅の週末を挟んで検

查入院と手術入院を合わせて60日以上病院暮らしの後、ようやく退院することができました。受けた手術は、開胸しての僧帽弁と三尖弁（注4）の修復手術、不整脈除去のための心臓電気回路修復手術と元々予定していたヘルニア手術と盛りだくさんでした。弁と不整脈については現在も定期的にフォローアップ外来に通い、5種類の薬を処方されています。いくら無謀な私でもここまで来ては以前と同じ形態・スタイルでの山行はできないものと観念しております。

注4 僧帽弁は心臓の左心房と左心室をつなぐ弁、三尖弁は右心房と右心室をつなぐ弁です。

5 私の登山スタイル

私の登山は、学生時代から一貫してテント山行です。山小屋はやむを得ないときにしか泊まりません。小屋泊まりを好まない理由は、学生の時は完全に経済的な理由でしたが、社会人になってからの理由は、いつ何を食べるか、就寝・起床の時間と場所など、何かにつけ小屋の指図どおりにさせられて自由がないこと、紅葉シーズンなど時によって超混雑となることです。

もう一つはスキーを利用しての登山です。我が国のスキーの歴史を紐解くと、最初はロシアとの戦いに備えての軍用移動手段として、民生用は主として貴族・金持階級のレジャーとしてです。登山もスキーも長らく貴族・金持階級のみレジャーであり、一般庶民のレジャー用となるのは1950年代以降のことです。スキー登山の何が楽しいかということ、無雪期に登った山を無雪期には登れないようなルートで登り、無雪期には不可能なルートでバージンスノーを蹴立てて滑降することができます。これは無雪期に決まった登山コースに行くのとは全く別の楽しみです。雪崩の危険は常に意識し、十分な対策を講じはしますが、その理由でやめようと思ったことはありません。

この原稿を書くために昔の資料を引っ張り出してみたら、私がスキーまたはスノーボードで頂上（または実力に見合う限りの頂上近く）から滑った山のうち、深田百名山に含まれるのは、八甲田山、岩木山、岩手山、鳥海山、月山、吾妻山、安達太良山、会津駒ヶ岳、燧岳、至仏山、巻機山、浅間山、立山、乗鞍岳、御嶽山と合計15座を数えました。

6 残された山の楽しみ

私は1941年3月生まれですから、後期高齢者目前です。上で述べたような事情により、本格的な登山は店じまいしました。本格的でない登山はというと、全く行かないわけではありません。気が向けば行きますが、やはりある程度高い山（私の基準では1,500メートル以上）でないとどうもイマイチ楽しめません。低い山よりいいかとも思いますが、昔少し経験のある沢登りやクライミングもトライしましたが、どうも存分に楽しむところまでは達しそうにありません。というわけで、近年は登山といえるような山には滅多に行かなくなりました。しかしスキー場から乗り物を使って可能な限り高いところ

まで運んでもらい、そこから1、2時間のスキー登高で頂上に達することができる程度の山でお気に入りの場所がいくつかありますので、まあ細々と続けているといえるでしょう。

平成27年11月 石澤芳朗